

藤原時代に於ける庶民生活と仏教

伊 藤 眞 徹

—
 神儒道仏の宗教思想綾なす、絢爛たる精神生活に日を過せりとするは、公卿大夫百官諸牧の特権階級であつて、莊嚴華麗の仏事法会には全く無縁の衆庶の实在を顧慮せざるを得ない。

日本仏教の歴史を大観するとき、教団の社会的経済的基礎を保全するため、多くの緇徒は世俗社会に随順することに之れ努めた。生活指標を官位の昇進と恋愛の成就の私的願望においた平安初期においては、顕密の名僧は彼等の願望成就の祈禱のために奔走した。しかるに、貴族の權威の失墜と社会不安は貴族の心境に変化をきたし、ここに当時の宗教的勢力の本筋から離れ、出家本来の精神を自覚した

新仏教運動の嚆頭は、貴族階級に漸く受容せられ、上の行うところ下に浸潤して、庶民の生活に随順した浄土教の展開を見るに至機教相應の仏教、有智無智、賢愚貴賤、道俗男女を扱ばざる救済、「家業を捨てず、往生の素意を遂ぐる道」は、中世をまつて始めて宗教生活の庶民化が実現したが、それに至る過程として藤原時代の仏教は重大な意義を持つものである。即ち社会経済生活に随順した仏教信仰の諸型態が見出される。

経済生活の高低を推知する準繩は、衣食住又は冠婚葬祭の生活及び風俗研究の成果に待たなければならない。

奢盈^一、三善清行の「十二箇条」に、往古は意見「崇節^二、儉^三禁^四服^五、澣濯^六之衣^七、嘗^八蔬糲^九之食^{一〇}」とあり、「王臣又

以下、至于庶人、追福之制、飭「終之資、隨其階品、皆立三式法」られていたが、奢侈の風世に満ち極まるところを知らずとある。蓋し此弊は「富者誇其逞志、貧者恥其不及」することに基いするものであるが、律令制度の弛緩は富の偏在となり、下司、下種と称せられる貧者の大衆生活の実質は、時代の経過と共に言語に絶するに至つた。この階級の経済生活の概要を知るために、当時の社会情勢と生活環境を探究し、この余剰経済力に乏しき階級にも光被する仏教の性格とその發展過程を知らんとするものである。

二

我が国の上古は土壤膏腴であり、人民庶富、上仁を垂れて下を收し、一国の政は一身の治の如きであつたとするは、儒者の上古を以て理想国家とする尙古思想によるものである。しかるに大陸との交通による農耕技術の導入、農地開拓及び灌漑土木工事の進展は、農業生産力に飛躍的増大をも

たらしたと考えられるが、延喜年間の国力が往世の十分の一に過ぎないと云う疲弊の原因については、三善幸行は風化漸く薄く、法令滋彰し、賦斂年に増し、徭役代々倍した結果、戸口月に減じ、田畝日に荒るるに至つたものであると指摘している。その一例として寛平五年（八九三）備中介として赴任し、その国の風土記を見た清行は、皇極天皇六年（六四七）百済に救援軍を派遣せんと、筑紫行事の途次、下道郡の殷盛なる一郷から、軍士を徴集して二万人を得たので邇磨郷の名称を得たことを知つた。しかるに天平神護年中（七六五—七六七）吉備真備が本郡の大領として戸口を調査した結果は千九百余人であり、貞観（八五九—八七七）の初め藤原保則は課丁を閲するに七十余人に過ぎなかつた。今彼の实地調査によればこの時、老丁二人、正丁四人、中男三人のみであり、後に延喜十一年（九一一）には一人もあることなしとの、藤原公利の帰還報告を得た彼は、この一郷についての推移の経過を顧みて、

謹計二年紀、自皇極天皇六年庵申、至延喜十一年末、

纔二百五十年、哀弊之速、亦如_レ此（本朝文粹二・二八）

と慨している、しかるに皇極天皇は在位三年であり、派兵の企ては齊明天皇六年庚申であることは、日本書紀の伝えるところであり、齊明天皇は皇極天皇の重祚であつて、齊明天皇在位中のことを、前の在位時代と誤つたことは明白である。

かく如き地方村落の壮丁の急速なる減少は、地方産業經濟開發の人的資源の減少は、人的資源の衰退を意味するものである。所謂賦斂年増、倍彼代倍によつて、勞力に相應する余剩財力の蓄積を伴わないのみでなく、最低の生活すら保証せられることなく、深刻なる生活脅威は年と共に増わり、更に地方派遣の国司の壟断は一層農民生活を困窮に陥れ、餓死線上を彷徨さす結果を招いた。「拾遺往生伝」には永長元年（一〇九六）四月病を得、死時近きを知つて出家せんとした信濃守藤原永病に、親昵相誘うて、

刺史者、朝之撰人之望也、為_レ家為_レ身有利、親族不_レ許、自然淹留（統浄六、六四）

とあつて、国司は「為_レ家為_レ身有利」とて、人の望むところとなつたことは、不当に産をなす不正の横行が考えら

れ、その被害の対象は被治者大衆であり、かかる擄取は中央都市の貴族階級においては、敢えて破廉耻行為なりとはせられなかつた。その産をなした一例は、「性太拘惜、為_レ刺史時、以_レ貪為_レ先」した但馬守源章任について、「統本朝往生伝」には、

自_二少年時_一、盛會_三風雲_一、補_三夕郎_一預_三榮爵_一、歷_三近衛少將右馬頭_一、吏_二於四箇国_一美作、丹波、伊予、但馬、家大豪富、財貨盈_レ庫、米穀敷_レ地、庄園家地布_二滿天下_一、本朝之陶朱倚頓也（統浄六、三〇）

とある。かくて地方に生活の基盤を失つた離農者の生活方は多様であるが、その一に逃避所として寺院が選ばれ、又流民の化した強盜の横行は著名である。意見封事には

伏以諸寺年分、及臨時得度者、一年之内、或及_三三百人_一、也、就_二中半分以上_一、皆是邪濫之輩也、又諸国百姓、逃_レ課役_二連_三租調_一者、私自落_レ髮、猥著_二法服_一、如_レ此輩積_二年漸多_一、天下人民、三分之_二一_一、皆是秃首者也、此皆家蓄_二妻子_一、口啖_二腥膻_一、形似_二沙門_一、心如_二屠兒_一、況其尤甚者、聚_二為_三群盜_一、竊鑄_二錢貨_一、不畏_二天刑_一不_レ顧_二私律_一、若国司依_レ法勘糺、則霧合雲集、競_二為_三暴逆_一（本朝

とある。かくの如き不純なる動機による、出家生活の凶暴邪悪は否み難いが、当時の僧風の頹廢著しき一端は、「而今上自僧綱下至諸寺、次第請用小僧沙弥等、持戒者少、違律者多」とか、「故国中法務、皆委附講講師、而講読師多非持律之人、或有贖勞之輩、況其国分僧少人、皆是無慚之徒也、蓄妻子、營室家、力耕田、行商衲」とか、更に又「維摩最勝堅義僧等、皆貪道修学之輩也、一鉢之外、亦無他資、而比年令之盛儲僧鋼并聽衆之資供、非唯積饌成山、猶亦有酒如准、已乖仏律、亦害聖化」との言は、履うべくもなかつた僧界の一斑を示すものである。かかる中には眞の仏道の存せざることを自覚し、山林斗藪に身を隠して、情熱を籠め、求道精進した西方願生者の存在することを見逃すことは出来ない。

三

地方困窮農民の飯糶は、前述するところによつて窺い知られるが、他方中央都市に於ける貧富の懸隔の状について見るに、嘗ては条里整然、山城盆地に形成せられた平安京

も、慶滋保胤の池亭記には

東京四条以北、人無貴賤、多所群聚也、高家比門連堂、小屋隔壁接簷、東隣有火灾、西隣不免余炎、南宅有盜賊、北宅難避流矢、南院貧、北院富、々者未必有徳、貧者且猶有耻、又近勢家、容微身者、屋雖破不得膏、垣雖壞不得築、有業不能大開口而唉、有哀不能高揚声而哭、進退有懼、心神不安、譬猶鳥雀之近鷹鷂矣(本朝文粹二二)

二二)

とあつて、都市計画性の喪失した無秩序状態と共に、貧富貴賤の群聚が、高家の常民に与える無言の圧迫を物語つてゐる。更に

或卜東河之畔、若遇大水、与魚鼈為伍、或住北野之中、若有苦旱、雖渴乏無水、彼向京之間、無空閑之地歟、何其人心之強甚乎、且夫河边野外非畜比屋比戸、兼復為田為島、老圃水得地以開畝、老農便堰河以溉田、夏天納涼之客、已無漁小鮎之涯、秋風遊狩之士、又無臂小鷹之野(同上)

とあつて、帝都の風致の变化の状が知られる。

高家に住する特権階級者が、如何に農耕生産事業に無關心無知であり、従つて文化圏外にあつた賤民に対する蔑視の感情を見んに、高度文化を享受し、高貴の生活を為し得た女流文学作家の言によれば

八月晦日がたに、太秦に詣つとて見れば、穂に出たる田に、人多くて騒ぐ。稲刈るなりけり、「早苗取りしかいづの間に」とはまこと、実にさいつ頃、加茂に詣つとて見しが、哀にもなりにける哉。是は女も交らず、男の片手にいと赤き稲のとは青きを刈り持ちて、刀か何にかあらん、もとを切るさまの易げに、めでたき事にいとせまほしく見ゆるや。如何でさすらん、穂を上にて並みを見る、いとをかしう見ゆ。(枕草子岩波文庫本下・二八)

とあつて、四季の推移、時光遷流転の迅速なるに驚嘆する情は、共感するところありとするも、田刈の農夫の手に持つを、「刀か何にかあらん」とて、故意に文学的に表現せるものなるか、将又貴族階級の如実なる知識の告白か不明である。農繁期の重労働も「もとを切るさまの易げに、め

でたき事」と、傍観者には「いとせまほしき」ところの逸樂的作務と見做された。又「紫式部日記歌」には

青柴にまぜて織りたるもみぢ葉は燃えぬばかりの色もかひなし(岩波文庫本一〇〇)

の一首がある。これ「ある山寺の湯屋の前に、しは木といふもの置きたるなかに、いと濃き紅葉のまじりたるが、をかしう見えしに」と云う詞書があつて、山賤の労苦も風情の陰に無視せられてゐる。

以上の如く社会組織上最大多数を占める、所謂下種又は下衆の生産事業に理解乏しき以上、かかる事業に従事する下種は、彼等の眼に如何に映じたであらうかと云うに、この解答は蔑視の一語に尽きる。即ち「枕草子」の作者は、「にげなきもの」として

下種の家に雪の降りたる、又月のさし入りたるも、いとくちをし(「枕草子」岩波文庫本上一六九)

とて、貴賤上下の区別なく、地上の万象を等しく覆う雪、森羅限なく照耀する月光をすら、賤の下種も高貴と等しく受くることを以て「くちをし」とし、天然現象を人為的に

差別し得られざることを以て嗟歎している。これ独り清少納言の個人感情の表現でなく、当時の貴紳の等しく抱いた共通意識の代弁であると見られる。

更に「かたはらいたきもの」に

旅だちたる所、近き所などにて、下種どものざれかはしたる（「枕草子」岩波文庫本・中三二）

とか、又「わびしげに見ゆるもの」は

年老いたる乞児かた、いと寒きをりも、暑きにも、下種女のなりあしきが、子を負ひたる、ちいさき板屋の黒うきたなげなるが、雨にぬれたる。（「枕草子」岩波文庫本中九二）とあつて、寧ろ彼等にとつて下種こそは、その救済を意圖企劃し、生活と文化の向上を志向せんとするよりも、地上に存在せざることを以て、享楽生活を一層美化するものと考察したのである。

更に仏の前には一切平等なるべき、寺詣でにおいて

初瀬に詣でて局にいたるに、あやしき下衆共の、後さしまぜつつ、居並みたる気色こそないがしろなれ。いみじ

藤原時代に於ける庶民生活と仏教

き心をおこして詣でたるに、川の音などの恐しきに、くれはしを登り困じて、いつしか仏の御顔をおがみ奉らんと、局に急ぎ入たるに、蓑虫のやうなる者の、あやしき衣着たるが、いとにくき立居ぬかづきたるは、押し倒しつべき心地こそすれ（「枕草子」岩波文庫本下一二四）

とあつて、下衆との同席を拒否せんとし、彼女にとつて飽迄下衆は蓑虫やうなるものであつて、「ないがしろなれ」、「押し倒したき心地」する存在である。然るに「蜻蛉日記」の作者摂政藤原兼家の妻女は

後の方を見れば、来困こじたる下衆ども、怪しげなる柚や梨やなどを、なつかしげにもたりて、食ひなどするも、哀に見ゆ

と述べ、寺詣に於ける庶民の習俗と、自己の生活との間隔甚しき下賤の様態に、同情的奇異の眼を振向けている。

前述の如き特権富裕階級の持つ宗教意識は、

王臣以下、至三于庶人、追福之制、飭レ終之資、隨三其階品、皆立三式法、而比年諸喪家、其七七日講筵、周忌法會、競傾三家産、盛設三齊供、一机之饌、堆過三方丈、

一僧之儲、費累三千金、或乞一佩陀家、或斥三禿居宅、孝子遂為三逃債之逋人、幼孤自成三流充之餓浮、

(本朝文粹二・三〇)

とあつて、盛儀華麗なることを以て最上の仏事功德なりとせられた。かかる風潮より推して、彼等の仏事法会に、蔑視せる下賤の参与することを拒否せんとする觀念は、必然的に潜在していたことと思われる。「中右記」の承徳二年五月一日の條に、雲林院の菩提講の状を述べて、

始說法之間誠以隨喜、己時許事了、堂中竝座老少男女稱南無声遍滿如雷

とあるが、文中の並座の老少男女には、自ら限界の在否を疑わしめるものがある。又堂中の西北庇において聴聞したことは、潜在意識の具象的示現である。かくて特権階級には、その富と權と智と嗜好を満たさしむるに足る所の、管絃歌舞、作詩頌歌の芸能を伴う仏教儀禮を尊しとなした。

四

律令制の弛緩によつて富は、地方及び都市の勢家に集注せられ、中産階級の存在せぬ変態的社会を現出した。下種階級を一層困窮に陥れ、「此ノ世ハ此テ止ナムトス、後世

助ケ給ヘ」(「今昔物語」岩波本二・一九三)と宿命的に現在を諦め、後世に希望を囑して、浄土を欣求する志会を熾烈ならしめたものは、頻發する悪疫天災の難である。文献に見ゆるものは、主として中央都市の状についてであるが、勿論かかる惨状は防疫防災施策の欠如せる時代にあつては、都市の状はそのまま地方に押当てて大過はなす。

十世紀後半三十年間において、「扶桑略記」には天延二年(九七二)八・九月には、疱瘡天下に蔓延して、「天下貴賤天亡者多」く、永祚元年(九八九)八月十三日台風襲来して、宮廷の諸建築物を初め、「万人家宅、諸寺諸社皆以顛倒、無三舍立、拔樹頹山」とあり、又同時に洪水高潮を伴ひ、「死亡損害、天下大災、古今無レ双」と云う被害を被つた。又長徳四年(九九八)は夏から冬に涉り赤斑瘡と世稱する悪疫流行し、「始自天皇至庶人、貴賤老少緇素男女、無一免此瘡者」とある。殊に六七月の交、京師に死者最も甚しく、この為め翌年正月改元して長保元年とした。

特に長保三年(一〇〇一)春の悪疫は、地方にも猖獗を

極め、「春月疫死甚盛、鎮西坂東七道諸国入京洛、疫癘殊甚」とある。依て悪疫退散を祈念する行事が民間において盛んに行われた。その一例は「扶桑略記」長保三年五月九日の条に、

京師諸人於紫野行御靈會、道路死骸不知其數、天下男女夭亡過半、七月以後、疾疫漸止

とある。悪疫流行によつて御靈會を修したことは、「三代実録」に貞觀五年（八六三）五月二十日、神泉苑において崇道天皇以下靈座六前を設け、花果を陳ね、金光明經一部、馨若心經六卷等が慧達律師によつて説かれたことは意義深い。又案を奏し、帝近侍の兒童、良家の稚子が舞人となつた。特に苑の四門を開放して、都邑人の出入縦覧が許可せられたが。かる御靈會は民間に行われていたものが、今かくの如く朝廷公家によつて採上げられたものである。即ち同書に

始自京畿、爰及外国、每至夏天秋節、修御靈會、往々不断、或礼仏説經、或歌且舞、令童貫之子、靚粧馳射、膂力之士、袒裼相撲、騎射呈芸、走馬爭勝、

藤原時代に於ける庶民生活と仏教

倡優嬾戲、遞相誇競、聚而觀者、莫不填咽、遐邇因循、漸成風俗（増補六国史九・一八三）

とあることによつて知られる。御靈は容貌形姿を以て具象せられたもので、「扶桑略記」天慶二年（九三九）八月の条に、小野宮年中行事を引用して、

近日東西兩京、大小路衢、刻木作神、相對安置、凡厥体像髣髴丈夫、頭上加冠、鬢刃垂纓、以丹塗身、成緋衫色、起居不同、遞各異貌、或所又作女形、对丈夫而立之、躋下腰底刻絵陰陽、構几案於其前、置坏照於其上、兒童猥雜、拜礼殷懃、或捧幣帛、或供香華、号曰岐神、又称御靈、未知何祥、時人奇之

（新訂国史大系二、二二四）
増補

とあつて、その形態と祭祀の方法が示されている。既に岐神と称する以上、岐路の街上に安置し、後には怨靈の祟りによると思考せられる、悪疫の消滅を目的として、祭祀せられるに至つた。

永長元年（一〇九六）四月入滅の信濃守藤原永清は生前舍弟已講に語つて

人之葬礼無益鬪奢、吾之没後勿營厚葬、滅後之事粗

所ニ注置也、勿レ増ニ減之、(「拾遺往生伝」卷中、統浄六・六四)

と云い、又雙林寺の一僧の房に往いて入滅したのは、「是年来之契也、亦墳墓之便也、是則洛中之居、有レ煩ニ葬送之故也」との理由を明らかにしている。延喜十四年(九一四)清行は、飭終の奢侈を指摘しているが、その弊は尙除去せられず、ただ願生者によつてのみ「葬礼無益ニ驕奢」ことが自覚せられていた。しかるに清行の指摘するところに縁なき、終葬の礼をも行い難い、困憊の極にある庶民の存在は、長保三年の「道路死骸不知其教、天下男女夭亡過半」の文によつて知られる。かかる状態は約三十年前も同様であつて、「蜻蛉日記」の作者は、石山寺に十日参籠せんとし、

忍びてと思へば、同胞というばかりの人にも知らせず、心一つに思い立ちて、明けぬらんとする程に、出で走りて、加茂川の程がかりなどにぞ、いかで聞きあえつらん。追ひて物したる人もあり。あり明の月はいと明けれど、逢ふ人もなし。河原には、死人も伏せりと見聞けど、怖

しくもあらず。粟田山といふ程に行き去りて、いと苦しきをうち休めば、ともかくも思ひわかれず、唯涙ぞこぼるるとあつて、この時代には行路病者又は病人死者を、加茂の河原に遺棄せられていたことが知られる。古く弘仁四年(八一三)六月一日の太政官符には

今天下之人各有ニ僕隸、平生之月既假ニ其身、病患之時即出ニ路辺、無ニ人看養、遂致ニ餓死、此之為ニ弊不可ニ勝言、(類聚国史七九禁制)

とあつて、之れ奴婢下僕の社会的地位の、下劣なることを物語り、触穢の思想の蔓延は、経済觀念と相峙つて、一層この傾向を著しきものにした。後世下賤の窮乏者と孤独無縁の死は、心ならずも奴婢下僕の例に准ぜざるを得なかつたのである。

孤独者は葬送の資を蓄積せんとし、彼の比叡山の無空律師は、「我已貧、後定煩ニ遺弟、竊以ニ万錢ニ置ニ于房内天井之上、欲レ支ニ斂葬ニ也」(日本往生極楽記)し、又枇杷大臣は御読経所の僧が、平茸に中毒死したることを聞き、「衰カリ歎カセ給フ事無限シ、貧カリツル僧ナレハ、何カスラ

ムト押量ラセ給テ、葬ノ料ニ絹布米ナト多ク給ヒタリケレハ、外ニ有ル弟子童子ナト多ク来リ集テ、車ニ乗セテ葬テケリ」とあつて、葬ることは葬料あるもののみ許された事実である。枇杷大臣のこの寄進を羨望した、東大寺の僧は、「□□カ葬料ヲ給ハリテ耻ヲ不見給ハス成ヌルカウラヤマシク候也、□□モ死候ヒナムニ、大路ニコソハ被弁候ハヌ」云々と述べ、葬らぬは死者の耻すべきところであるが、無産者は大路に弁てられるのが通例である。かの賀古駅の教信の死について、「日本往生極楽記」に

駅家北有ニ竹廬、廬前有ニ死人、群狗競食、廬内有ニ一老嫗一童子、相共哀哭（続浄六・一一）

とある。又羅城門の上層において、老嫗が年若き死女の枕頭に坐し、頭髮を抜取る光景を覘覽した盗人は、抜刀してその所以を訊すに

嫗己カ主ニテ御マシツル人ノ、失給ヘルヲ葬フ人ノ無ケレハ、此テ置奉タル也、其ノ御髪ノ長ニ余テ長ケレハ其ヲ抜取テ鬘ニセムトテ抜ク也（今昔物語 岩波文庫本五、一九〇）
とあつて、無資産孤独の名族の死は、下賤の死に混ぜられ

た。又「然テ其ノ上ノ層ニハ死人ノ骸ソ多カリケル、死タル人ノ葬ナト否不為ラハ此ノ門ノ上ニソ置ケル」と云うのが、当時広く行われたところであると考えられる。

都市においては「京中及ビ天下ニ疫癘盛リニ發テ病ニ死タル輩多カリ、然レバ道ニ死屍隙無シ」（「今昔物語」岩波文庫本三・二四）とするも、地方村落においては、播磨国印南野の葬送の一例が見られる。即ち「今昔物語」卷二七、（岩波文庫本五・五九）に、夜半に数多の人員が灯火を点じ、僧は西方に金を扣き念仏して送る。式畢つて「其ノ後亦鋤鉄ナト持タル下衆共、員不知ス出来テ、墓ヲ只築ニ築テ、其ノ上ニ卒都婆ヲ持来テ起ツ、程無ク皆拈畢ヲ後ニ多ノ人皆返ヌ」とある。これ変化の化作するところを記したものであるが、此の地方における斂葬の様式、築墓の状を伝えるものと解せられる。かくの如き地方農村の埋葬は、必ずしも衆庶の富裕生活の証左でなく、地縁關係と勞力提供の互助精神による、簡素化によつて行われるものと思われる。かくて斂葬の不能状態から推して、無産下種の生活狀況は推して知ることが出来る。

上下各層の大衆によつて、志求せられた來世思想について考察するに、延長四年(九二六)七月四日、宇多法皇は故源融の爲めに、七箇寺において誦經が修せられた。その願文に

大臣亡靈、忽託_三宮人_一申云、我在世之間、殺生為_レ事、依_三其業報_一、墮_三於惡趣_一、一日之中、三度受_レ苦、劍林置_レ身、鉄杵碎_レ骨、楚毒至痛、不可_三具言_一。(本朝文粹一四・二五)

一)

の託言を載せて、生前の不善業による招果の痛苦を訴えている。その苦報の酸鼻は「往生要集」に筆を極めて表現し、その美術的描写は一層深刻である。「枕草子」に

御仏名のあした、地獄絵の御屏風取りわたして、宮に御覽ぜさせ奉り給ふ、いみじうゆゆしき事かぎりなし、これ見よかすと仰せらるれど、更に見侍らじとて、ゆゆしさに、うへやに隠れふしぬ(岩波文庫本上・二一八)

とあることによつて知られる。この未來惡趣の苦果を離脱せんとする志念は、浄土往生の作善の積聚の実踐となる。獸穢は即欣淨であつて、この精神を具象化したものは「今

昔物語」卷一二(岩波文庫本、一・一一〇)に、河内国若江郡遊宜村の一沙弥尼は、「仏ノ像ヲ写ス、ソノ中ニ六道ヲ図シテ此レヲ供養」したのを適例とする。「御堂関白記」寛弘八年三月廿七日の条に

着左仗座、講後退出、供養法華經、是只為後生也、作願文匡衡、作非本意、多云現世事、仍令改直、等身阿弥陀仏同經百卷也、今年可重慎、而所修多是為現世也、此度只恐後生

とある。此時の講師は院源僧都であり「論說未曾有、如心開本意、衆人所感無比」とある。これによつて仏事作善の本意(願)に、現世榮耀・壽命福祿と亡靈無上菩提のためと、自己の後生善処の三種に大別することが出来る。院源は

「紫式部日記」(岩波文庫本、一六)によると、寛弘五年(一〇〇八)十一月、中宮彰子の敦成親王(後一条天皇)御産の時、「験者といふ限は、残なく参りつど」うた一人であり、十一日産室真近にて、「僧正ぎやうてふ、僧都、法務僧都など、さぶらひて、加持まゐり、院源僧都、昨日書かせ給ひし御願書に、いみじき事ども書き加へて、読みあげ続け

たる言の葉のあはれに尊く、頼もしげなる事、限りなき」
尊き験者であり、道長の厚く帰仰するところであつた。法
華経供養の講師が、院源なることから推して、この法会を
以て匡衡が、現世のための仏事と解したことは、無理から
ぬことである。かかる趣きからして道長の宗教意識の推移
は、現世から後生菩提に志向するが、このことは兼実の生
涯において最も顕著に見出される。元来公家貴顕階にお
いては、後世的なる行業、殊に往生浄土の念仏は禁句とせ
られていた。堀川天皇は嘉承二年（一一〇七）七月、御惱
重態に陥られ、定海阿闍梨に観音品を読ましめ給うた。

「讃岐典侍日記」には

「いみじく苦しくこそなるなれ、我は死なんずるなりけ
り」と仰せられて、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と
仰せらるるを聞くに、ただにおはしますをりにかやうの
事は局々の下人まで、いまいましき事にこそいふを、御
口よりさはさはと仰せられ出すを聞くは、夢かなとまで
あさましければ涙もせきあへず（岩波文庫本、二五）

と臨終の状を記している。「局々の下人まで、いまいまし
き事」に云う念仏は、当時の社会通念として、絶望的境地

において唱えるものとして、禁忌せられたのが実状であら
う。されば往生極楽の念仏は、現世祈願に次ぐ仏事であつ
て、富勢心のままなる生活環境の中に、見出される仏教と
は「枕草子」作者は

季の御読経の成儀師赤袈裟著て、僧の文ども読みあげた
る、いとらうらうじ（岩波文庫本、中・一五四）

と、「えせものの所うるをり」として、僧侶にしかべき尊
嚴の場を賦与し乍ら、一面においては

こわき物の怪あづかりたる験者、験だにはやくはよかる
べきを、さしもなきをさすがに人わらはれにあらじと念
ずる、いとくるしげなり（同上・一五九）

とて、極めて理智的批判的態度を以て冷視している。され
ど更に反面には

常に聞くことなれば耳馴れて、めづらしう覚えぬにこそ
あらめ（岩波文庫本上、二二〇）

とか、又は説経師は顔よき、つとまもらへたるこそ、その
説く事の尊さも覚ゆれ（岩波文庫本、上・二二五）と云う仏
教の尊嚴無視も、習慣性による宗教感情の喪失と、遊逸的

恣意的仏教觀を表明している。ここに注目すべき転機をなすものは、無法思想の浸透であつて、往生淨土の行業も、聖道的なるものより淨土教的なるものえ、諸善より念仏一行に移行した。仏寺造立の善根を否定した前常陸守源經隆について、「拾遺往生伝」巻中に

不貯財物、只与乞者、或人誘曰、徒自与他人、以
此造仏寺、答曰、資貯如浮雲、可施於乞者、何
強惜財貨、可造仏寺哉云々（統淨六、六四）

とあつて、慳貪を捨離することを基とし、永保元年（一〇八一）二月病を得て、「不摂日時、忽以沐浴」し、堂中の弥陀仏前に、西面して臥し「身心不乱、称念不断、顔色如眠」くにして入滅した。これ日時を摂はず沐浴した進歩主義的思想家であつて、当時の支配階級の抱く仏事善根觀念に、彼は勇猛果敢なる一石を投じたのである。

六

壮麗華美な年中行事の仏教儀礼、修善の仏事は、富勢の誇示とも見られるが、之れに反して物量乏しき下種は、撫育の愛を思い、報恩の志あれども、功德を修する力及ばない

のである。「今昔物語」巻一四（岩波文庫本二二・六）に、越中国書生の妻女は、死後立山山中の地獄を尋ねた遺子三人に、「罪ミ深クシテ輒ク此ノ苦ヲ難レ免シ。広大ノ善根ニ於テハ汝等身貧シテ力不堪ズシテ修セムニ不能ジ。然レバ多ノ劫ヲ経ト云フトモ此ノ地獄ヲ離ル事不有ジ」と告げ、共に得脱の善事を修し得ざる境遇を、嘆ぜざるを得なかつた。この現世の不遇は宿世のよからぬにより、現在のよからぬは、來世の不幸を招來するとの三世因果の思想は、現世を祈るに資産なく、「此ノ世ハ此テ止ナムトス」との絶念は、現世の不遇に苦しむ常民を駭つて

譬ヒ現世コソ不叶ザラメ、後世ヲモ助ケ給ヘカシ（「今昔物語」巻一六、岩波文庫二・二〇九）

と後生善処を念ぜしめるに至つた。その所帰の客体は、弥陀・觀音・地藏であつて、この中觀音の靈驗所として、「梁塵秘抄」に清水、石山、長谷、粉河、彦根山、六角堂等が挙げられ、地藏信仰については祇陀林寺、六波羅密寺の地藏講の盛行が知られている。弥陀に觀音又は地藏を並願することは二世の利益を志求する特有の信仰である。

弥陀信仰を広く衆庶に弘通したのは空也であつて、慶保胤は「寧非奉如来勅、為如来使来此娑婆世界、度干濁悪衆生乎」（『本朝文粹』二六八）と讃じ、その徳化の広きことは、その行履によつて知られる。しかるに高階良臣（九八〇寂）は、「齒迄知命、深帰佛法、日夜誦法華經、念弥陀仏」し、慶滋保胤は「方今令一切衆生入諸仏知見、莫先於法華經、故起心合掌、講其句偈、滅無量罪障、生極楽世界、莫勝法弥陀仏、故開口揚声、唱其名号」（『本朝文粹』一六九）と述べ、性空の弟子沙門平願について、「拾遺往生伝」巻中に、「沙門即捨衣鉢、偏營仏事、占広河之原、設無遮之会、朝暮講法華妙典、初後修弥陀念仏」とあつて、共に天台系浄土教が主流をなしてゐる。

しかるに此の間から増賀の弟子仁賀は、「深恐後世全棄名聞、或称嫁寡婦、或称有狂病、不随寺役、一生念仏」（『続本朝往生伝』続浄六・二五）し、延暦寺の覚尊は「唯修浄土之業、始以念仏為宗、後漸明止観、且夕唯事斗藪」（同上、二八）として、德行山洛に名高く、

藤原時代に於ける庶民生活と仏教

摂津国榎並郷の清仁は「以其供米不敢積集、招無縁人朝暮眷之」（『拾遺往生伝』巻上、続浄六・五〇）と衆に親近し、又筑前国内山寺の安尊は、「雖有行業、不被知人、誦誦祕音罄鈴無聽、屋謬好博奕狂乱之戲、夜竊成坐禅經行之勤、如無智者似無行人」であつて、外相を軽んじ、内行業を主とし、「可憐者必憐、可救者必救」うて、世人に安尊如来と尊称せられる等（『後拾遺往生伝』上、続浄六・九五）念仏を専称し、斗藪を事とし、民衆に親昵する傾向の漸興は、下衆の結縁化益を意味することとなる。偏えに世事を抛つて、只念仏を唱えた大和の阿弥陀房は「或人夢、若欲見阿弥陀仏、可見大和国阿弥陀房上人云々、此言及広、往而結縁者多矣」（『拾遺往生伝』下、続浄六・九〇）との伝文は、此間の消息を物語るものである。

如上の僧界の風潮は、俗界に影響を及ぼして、備中国吉備津宮の神人藤井久任は「多年之間、漁釣為業、而間寛治四年二月比彼中忽抛俗網、俄以出家、其後念仏之外別無行業、不離妻兒不專精進」して、八月彼岸に焼

身往生し（拾遺往生伝）中、続淨六、六七）、又年齢八旬に至るも三宝に帰せず、齋日節時にも精進せず、最後一心不乱、十念成就して命終した橘守輔は、両三年晩暮に読誦した発願文中に、「繫念弥陀仏、帰心妙法経、就中、今日以後、死期以前、不_レ論淨穢、不_レ整衣服、毎昏向_レ西二手合掌、唱_レ弥陀宝号、称_レ法華題目、若命終之刻、邪倒礙心、不_レ能念仏、故以_レ長時之一称、必為_レ其命終之十念」すとあり、彼の行業は妻妾の眼に「本来邪見無指善事」（同上、七〇）と映じたのである。

かくて匹夫下賤者の異相往生者に、江州淺井郡岡本郷の鹿菅太がある。彼は中年以後田園に帰つて狩獵を業としたが、危急に及んで出家した。「其人尋常無_レ所_レ修、只当_レ斯時、举_レ声誦曰、若有聞法者、無_レ一不成仏、教声之後念仏氣絶、」した（同上、六八）。又下道重武は「一生之間殺生為_レ事、漁鱗甲_レ為_レ産業、殺_レ禽獸為_レ活計」したが、終焉に悪瘡を縁として念仏に帰し、八条河原の荒蕪の地に、「靡_レ草展_レ筵向_レ西而坐、口唱_レ弥陀一心無_レ散乱」く命終した（同上、六八）。

かくて浄土信仰は、「口唱_レ名号、心觀_レ相好」（日本往生極樂記序）するものから、「所_レ慕者極樂也、所_レ歸者觀音也、毎_レ修_レ善事不_レ論_レ細、尽_レ以_レ其業_レ廻_レ向_レ彼土」（拾遺往生伝序）する善事の励修は、「於_レ末法之万年、炳_レ弥陀之一教、道俗男女、誰不_レ歸者乎」の誓願に頼みあるが故である。されば弥陀本願に乗すれば、「雖_レ十惡無_レ嫌、屠兒終命之曉、覺_レ月照_レ發露之臆、猶徒瞑目之時、奇香薰_レ見火之室」（後拾遺往生伝序）する益を蒙ることを得る。この往生伝作者の信念は、平安時代の浄土教の發展を物語るものであり、同時に知識階級より庶民階級に、浄土教の浸透する様態を、示すものと見ることが出来る、

七

諸善の雑修から念仏一行の実修、雑多から專一への信仰の純化、外相より内実の尊貴は、そのまま庶民の信仰生活への、参劃を可能ならしめるものであり、万機普益、弥陀一教利物偏増の讚言、徒爾ならざることを知るのである。

凡そ教義信仰の伝播型態は、伝道者の不惜身命的態度と、信仰の烈火の燃焼を中心として、波紋状型を以て四辺の道

俗に流布せられる。殊に庶民階層への、伝道者の基本的要素としては、結論的には民衆に親近感を包懐せしめることであつて、無位無官の凡僧が、後弥陀の権化なりと仰せられたことは、前出の阿弥陀房を初め、其例甚だ多い。次いで民心安定方策体証の高徳であつて、淨藏大法師は凡顯密、悉曇、管絃、天文、易道、卜筮、教化、医道、修驗、陀羅尼、音曲、文章、芸能、悉以拔萃」(拾遺往生伝中「統淨、六、五八)き、彼の朱雀門の倒潰を予言し、人命を救助した僧登照のもとには

京中ノ道俗男女此登照ガ房ニ集ル事无限リ(「今昔物語」岩波文庫本四・六七)

と群参した。更に各地を修行々化して、法味を施与した遊行僧がある。彼の比叡山僧長増は顯密を修学し、後に極楽に往生せんことを念じ、単身山を出で伊予に渡り、門乞句と俗称せられる容姿に変じ、念仏して世を送り、遂にある旧寺の林中にて、端坐合掌して西に向い命終したが、「今昔物語」には

国人共此レヲ見付テ悲ビ貴ビテ、取々ニ法事ヲ修シケリ、讚岐、阿波、土佐ノ国マデ此ノ事ヲ聞キ継テ、五六年ニ至マデ此テ門乞句ノ為ニ法事ヲ修シテケリ、然レバ此ノ

藤原時代に於ける将民生活と仏教

国々ニハ露功徳不造又國ナルニ、此ノ事ニ付テ此ク功徳ヲ修スレバ、此ノ国々ノ人ヲ導ムガ為ニ仏ノ権リニ乞句ノ身ト現ジテ来リ給ヘル也トマデナム人皆云テ、悲ビ貴ビケルトナム(岩波文庫本二、二八)

とあつて、四國地行化の跡は総て如來の権化と信じ、見聞の及ぶところ念仏に結縁せしめたことが知られる。

一宿ノ聖人と称せられる遊行僧の存在と共に、聖、持經者の教化も後世に及ぼす感化大であつて、「梁塵秘抄」には箕尾、勝尾、書写山、出雲の鰐淵、日の御崎、熊野、那智、大峯、葛城、石の槌、熊野の那智新宮が聖の住所に挙げられて居り、四方の靈驗所としては、伊豆の走り湯、信濃の戸隠、駿河の富士山、伯耆の大山、丹波の成相の名を挙げ、同書には筑紫の靈驗所として、大山四王寺、清水寺、武藏清滝、豊前の企救の御堂、龍門の本山、彦山を列ねていることは、筑紫豊前を中心とする仏教活動を知る端緒となる。かく聖の住所、靈驗所は地方庶民に最も接近せる、仏教弘通の橋頭堡であるのみでなく、その周辺及び広くそれに至る交通網は、聖又は修行者の不作為的教化の媒介として重要な意義をもつものであることを認めざるを得ない。